負傷者

C. 收容所

その日。

そこは陸軍被服廠倉庫。高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床だった。その上に軍用毛布を敷いて逃げて来たものたちが向きあいに横はっていた。壁ぎわや太い柱の陰に桶や馬穴が汚物を溜めそこらに糞便を流していた。

足のふみ場もちゃくそくにこうかしているのは大抵疎開家屋の跡片付けやっていた政府雇員の中だったが、顔頭から全身へかけての火傷や、あせと細菌繃帯ちゃのために汚穢の古着袋をしん老婆の群が見えた。

「助けて、お父さん助けて」

「水・水・みずをくれるのか？・あ・うれしい・うれしいわ」

「五十銭・これが五十銭よー」

「足のとう死んだのけて」

声は弱く細くとめどもなく。すでに死を覚れたの心あせ。なかばはもう動かぬ屍だったが。とりのけの人手もなかった。

ときどき娘たちを捜す母親の声。防空服装で入って来た。そして半狂乱の母親。

似たかおたちをの若い婦人。回った。それを知ると力女たちの声はひとしきり必死。水と助けを求めた。

「おばさんミヅー・ミヅくんでまちてー」

髪のない、片目のみきつ、かむすめが柱のかげから半身を起しへしゃげた水筒をさしあげをいつまでもあきらめずくりかえしていた。

しかしやけどん水はいけないときかされているおとなは決してそれにとりあはなかった。

うで多くの力せはけてつかれうつむけに動声をおとした。

灯のない倉庫。そのまい夜が来た。

ふつかめ日。

たふかのけたか。床の群は半ばは減ってきのうの叫び声はなかった。

枕もとの一椀の粥が腐のたまりとなる。ところどころに焼をみつけた父母母が鍋人で分けをのまっていた。飢くしろ、むすめの眼であった。

白色の蒸ちゃん、とだけ合コ死体の横に大きなはいた。

三日め

K丁の容態・呼吸30・脈はく100・全火傷部位・顔面半ば・背中全面・腰ケし・両腿・若干あり・食慾皆無・午後中は未だうとうとの叫び声を黙ってたまい水しほしがってたが夕方より水のまーしてお茶のまーして生例もみかんべんいるといいはじめた。

四日め

白い水様下痢。眼つりあがり。（苦悶）もう微笑の影も走ることがない

火精部はすべて化膿くさりはじめた。

火傷には油をしらい。下痢にはげんのしようをもつて来るのませよ。

アッ手をとり立ーそういう噂がちらほらしていた。

五日め

下痢に血が混じる。（ていた）

蜂の細い斑点が皮膚に出はじめた

足のふみ場もなかこそ食堂はがらんとして来て、あちらの隅、こちらの柱のかげに

むくみきつて抱き合ひ、二、三人のみとりてが疲いていた

高窓からの陽がコンクリートの床を移動すると（しみのついた）

暗い部屋の横たわる人間を照らした

早くから自殺しのび、ローソクの灯をたよりに去つてゆく人々を面のような表情が

見送っていた（床にうずくまった）

五日め

髪の手をやるだけで抜けてゆく。下痢の血も止らない。熱はなく、体は化膿部に

ほそぼそと苦悶を訴えるー。（かたまって）（ぼくぼくと落ちて）

「敵の目が、かがやく、われわれの骨髄、はかりすぎる。——」

うしろ（濃厚な）（ぼくぼくと）、火も消えもないのにどこかとよろめくもの

ー敵は力尽いているのだ、そうわしの幸福だー

（あちこんの）

（中毒）

（ぼくぼくと）

（ぼくぼくと）

（ぼくぼくと